

北緯62度からの 手紙

YELLOWKNIFE

CANADA



佐田 宏

手紙のはじまり

もうここに来て約2ヶ月が経ってしまった。早くも有り、遅くもありといった感じだ。気温は最低-38度、最高-13度が、今の記録で、太陽がある日が前者で、雪が降った日が後者である。ここでは晴れ、特に晴天の日はむちゃくちゃ寒い。

そう、ここは北の北の北の北、北緯62度のイエローナイフという街なのだから当然といえば当然である。そして私は、そこで犬ゾリ師になるべく修行中の身である。

いきさつは後で書くとして、まず僕の仕事の事を書こう。



第1章 仕事編

収入源

まず始めに言うておかなければならないのが、犬が約100匹近く居るという事だ。「101匹ワンチャン」ではないが、これはもう大変な数である。こいつらが一斉に吠えたと、もう大変。だが、こいつらの世話をするのはもっと大変だ。

ここはフランクという60歳ぐらいのアイルランド出身の気の良い叔父さんと、その妻らしきピビアンとでやっていて、僕はそこのヘルパーをしている。



まず、ここの収入源となる仕事とその内容についてお話ししよう。

「犬ゾリ」と言うと、ハスキー犬を思い浮かべていたが、ここの犬達は違う。ハスキー犬は「物を運ぶ為の犬」としてはパワーも体力もあっていいが、「レースをする為の犬」としてはどうやら適していないらしいのだ。ハスキー犬を犬ゾリに使用しているのは、イヌイット達ぐらいで、ここの犬達は雑種だ。

雑種といっても、良い犬になれば数十万円の単位で、売買される。それがここの基本的な収入源になっている。犬の価値は、どのレースに勝ったかで決まる。従って、レースに勝たねばならない。レースに勝つ為には、当然トレーニングが必要となって来る訳だが...まあ、その辺の件は、＜犬ゾリ・レース編＞でお伝えしたい。



それより、他の収入源といえば、犬ゾリレースの賞金も結構な収入源としている様だ。

また、その他の収入源としては観光客を“ボーゲン”と呼ばれる、荷物や人を運ぶソリに乗せて収入を得ている。これがどの様なものか少しお話すると、“ボーゲン”は、1回に3人まで乗る事ができ、10頭引きで行われる。スピードとしては時速約15マイルといったところで、距離は約5マイルだ。(1マイルは約1.6キロ)こここの家の前は湖になっていて、そこにトレイル(道)を作りそこを走る。トレイルは次の湖まで作ってあり、そこまで行って帰って来るコースになっている。

湖と湖をつなぐ道は、“ポータージュ”という林の中の細い道になっていて、結構スリルが楽しめる。しかし、俺達にしてみれば、他に犬ゾリや、スノーモービルにすれ違くと大変な事になるので、とてもいやな場所だ。料金は一人当たり\$35だが、毎日客が沢山来るわけではないので、まあ、これはそれほど大きな収入源とはならない。

他にも、スノーモービルのレンタル業の営んでいて、料金は一人\$45、犬ゾリとスノーモービルのセットで一人\$60と言ったところだ。

以上が主な収入源である。



僕の仕事

僕の仕事はソリのセットと犬達を連れて来ることだ。犬を連れて来るといっても、犬はとても凄まじいパワーを持っているので大変である。犬の首輪を持って立たせるようにして2匹連れて来るのだが、始めの頃は、2匹などとても持てず腕も引きひぎれそうで、テンテコマイしていた。

基本的に仕事はこれをしなければならぬと言うものはなく、何も教えてくれない。見て、考え、覚えなくてはならない。だから、始めの内は勝手に、「これだけか」などと思っていた。ところが、仕事を覚えて来るとドンドン仕事量が増えてきて、最終的には全ての過程を一人でやることになる。一日に客が一回か二回なら、まだ、楽なのだがそれ以上はきつくなる。今までで最高6回と言うのがあった。どんなものか話そう。

まず、犬を連れてきてソリと犬をつなぐ、そしてフランクが客を乗せ、湖へ出て行く。

そして、その間に次の犬を連れてきておく。

フランクが帰ってくると、犬をソリから放し、次の犬をセットする。また、フランクが湖に客を連れて出て行く。

その間に、前に使った犬をその犬達の小屋にもどし、次の犬達を連れて来る



この行程を繰返す事6回、昼食も無ければ休憩も無い。約マイナス30度の世界で、汗だくになり働いている。ここで更に厄介なのが、この汗である。ちょっと外で座るとTシャツにしみこんだ汗が凍る。最悪である。もう元には戻らない。最悪である。その上フランクがレース用の犬をトレーニングさせようものなら、もう1チーム連れて来なければならない。もう、そんな時は何も考えない様にしている。何も考えず、体を動かし、働く。それだけ。

まだ別の問題もあった。犬の名前である。当然全ての犬には名前がついている。しかも英語名！！これは困った。その打開策として、地図を作った。ちなみに犬小屋はテニスコート5面分くらいのところに100ちかくある。これは結構大変な作業だったが、地図が完成した頃には、犬の名前を覚えてしまい地図は必要なくなっていた。

さて、他の仕事としては、毎朝、全ての犬に水をやる事だ。犬達は水が嫌いなので、餌を混ぜてやる。飲まないとすぐ凍ってしまう。

次の仕事としては、犬のフンの始末だ。フンといっても凍っているので、臭くない。まさしく、バナナではなく“フンで、釘が打てる世界”だ。これは大変というより、時間がかかるので面倒くさい仕事だ。今まで話したのが主な昼の仕事と言ったところだ。



夜は犬達に餌をやる。主な餌はチキンで、他にビーフ、レバー、ドックフードを水で混ぜたもので、デカイごみ処理用ポリバケツ2杯分にもなる。これは僕一人ではなく、フランクと二人で行う。僕が受け持つのは約30匹ぐらいである。でかいバケツで餌を運ぶのだが、これも、物凄く重く、始めの頃は夜になると腕が上がらなくなっていた。

そして、餌をやった後に、次の日の餌作りをやる。これはチキンがブロックで凍っているのので、そのチキンを斧で8等分です。1ブロックが約60ポンド（20キログラムくらい）で、それを毎日1ブロック半使用する。これも結構難しい。始めの頃はチキンは“カットする”。と言うよりもむしろ“砕ける”といった感じで、ぼろぼろにしてしまった。

しかしこれも徐々に慣れ、約1週間もすると、「ナイスショット」と声をかけられるまでになった。そして、この“ナイスショット”作業を終えると、カットしたチキンを人間が2人くらい入ってしまいそうなバケツにいれ、家に持って入り、そこにお湯を入れる。このバケツを置くところ、水が出るところが約10m離れているのだが、ここを何回も、お湯を運ぶ為に往復しなくてはならないのだ、これがツライ。ホースを僕が買ってしまおうかと思ったくらいだ。これでは、まるで昔のジャッキー・チェンの映画のようだ。



まあ、以上が僕の1日の仕事内容だ。日曜も祭日も何もかも関係なく、淡々と毎日こなさなければならぬ。犬が好きでなければ、やってられない職業である。

第2章 犬ゾリ レース編

犬ゾリとは

犬ゾリとは本来、イヌイットと呼ばれる部族が、交通手段として使用していたものである。もちろん現在でも犬ゾリにしか頼らざるをえない様な所は沢山ある。しかし「犬ゾリといえばレース」と言う発想の方が主流になっているようだ。

イエローナイフで行われるレースの中で、賞金が一番良いのは150マイルを3日間で走るレースだ。優勝金額は\$10,000だ。アラスカには賞金が\$1000,000になるレースもあると言う。

と、以上の様にとてつもない大金が動く、しかもエントリーするのは精々10チーム程度なので、ほとんどのチームは賞金を得ることが出来る。主催者は、町や州単位であり、そこから賞金が出るのだ。

しかも、前にもかいたが、1匹の犬が数万円～数十万円の単位で売買されている。これだけを見るととても儲かりそうだが、犬ゾリだけで生活をしている人は、どうやらないようだ。フランクも夏になると別の仕事をしている。ちなみにエサ代は、1ヶ月で\$1200だ。夏は、走らないし、寒さで体力が消耗しない為、約半分で済むそうだ。

ここの仕事はレース中心に動いていく。フランクは大抵10頭引きの大きなレースにしか出ない。犬は体力のある2・3歳の犬をトレーニングする。トレーニングは14頭引きでやり、調子の悪い犬や怪我をした犬は外し、最後に残った最高の10頭をレースに出す。見た目、オスは大きく、体力もありそうだが、からだの大きなオスは、長距離を走れない為、長距離レースには小型の犬が出る。ちなみにフランクは五匹のオスと五匹のメスを大会に連れて行った。大きな犬は4頭引きのレースでは活躍する事が出来るそうだ。



僕がいる間にあったレースは2回、10頭引きの、15マイルと30マイルのレースだ。この30マイルのレースは賞金が、\$3,000とあって、町全体で盛り上がる。フランクは昨年このレースで勝っている為、新聞などにも載り、話題を集めていた。大会形式には14チームが順番にスタートタイムで競うレースと、同時にスタートする2通りある。今回は後者だ。この同時スター

ト形式は、スタートがとても重要で、犬を押さえている僕もかなり緊張した。

スタートは上手く行った。ただし、リーダー犬が、途中で怪我をしてしまい、4位と言う結果に終わった。ちなみにリーダー犬とは一番前の2頭のことで、このリーダー犬の出来次第でレースの勝敗の分かれ目となる。

今回の最高タイムは1時間45分で、他のチームも2、3分後にはゴールした。時速約30kmで、4頭引きでも同じスピードとなる。頭数が増えるレースの距離が長くなる。僕も4頭引きや、6頭引きならレースに出場させてもらう約束をしていたが、残念ながら滞在中に、そのカテゴリーのレースはなかった。ただ、僕がここを去る次の週に、そのカテゴリーのレースがある。と言うではないか。とても残念だった。

犬がレースに出る為には、厳しいトレーニングを乗り越えなければならない。トレーニングがスタートするのは1歳ぐらいからだ。滞在中、犬ゾリを初めて引く犬達を何匹か見る事が出来た。通常の引き方というのは、2匹ずつ並んで走る。だが、その初体験の犬達は、自分の近くに他の犬が居る事が始めてなので、喧嘩をしたり、じゃれたりして、前に行こうとしない。それをどうやって他の犬達のように、前に走らせるようにさせるか。それは、悪い事をしたら叩く。これだけである。単純明快。僕はさすがに叩く事はできなかった。フランクはバシバシ叩いていた。

ちょっと話は逸れるが、この犬達は皆しっぽがたれている。何匹かはそれがお腹にくっついてしまうほどだ。それに完全に人間を恐れている。それでも、子犬達だけは人懐っこくしっぽを振っている。たぶん厳しいトレーニングの間に否が応でも教え込まれるのだろう。ちなみに、ヒドク言う事を聞かない犬に対してはムチを使う。



僕の話

ここで僕の話をする。ぼくはここで働く代わりと言ってはなんだが、犬ゾリを自由に乗る事が出来る。始めて乗ったのは4頭引きの4マイルだ。フランクがスノーモービルと一緒に付いて来てくれた。それは、もし転んでしまってソリと離れてしまっても、犬達はそのまま走り去ってしまうからだ。だからもし、転んでも決してソリから手を放してはいけない。転んでも犬が走っていたら、無理矢理でもソリをおこし、走り続けなければならない。

他に注意すべき事は、もし犬がロープや他の犬と絡まっていたら、ソリを止め、スノーフックでソリを固定し、それを直さなければならない。頭数が増えれば、当然大変になるので、ソリ引きの初心者は4頭引きからスタートする。

犬ゾリはスキーに似ていて、結構簡単に乗りこなす事が出来た。掛け声の仕方は、右が「ウ」で、左が「チャ」、止まれが「ウォーッ」である。これを叫びながら、ターンするのだが、頭の良いリーダ犬だとちゃんと曲がるが、頭の悪い奴は曲がらない。曲がり角を通り過ぎてしまうと、止まってUターンしなければならない。これは危険を伴うので、僕はなるべく頭の良いリーダ犬を連れて行く。何故ターンしなければならないかと言うと、トレイルは4・5・16・25マイルとあり、それは同じ道だ。そしてその距離のところまでターンして、同じ道を戻れるようになっている。だからターンしないとドンドン先へ行ってしまふ。



僕は今、すでに4頭引きなら一人で5マイルは乗っていい事になっている。だが、5マイルになるとポータージュ（狭い道）を通らなければならない、これはスリルがあり、楽しめる。ただ、他の犬ゾリか、スノーモービルに出あうとよけられないので大変だ。ただ4頭引きだと比較的、楽によける事が出来る。フランクなどは14頭引きなので、もし遭遇すると大変な事になる。

ある日フランクが14頭引きに行く日に、無理と解りながら「ストレートだけ乗せてくれ」と言ったら、なんと良いと言うのだ。フランクが16マイルを14頭引きで行くのをスノーモービ

ルで追いかけた。ストレートを2回、合わせて5マイルぐらい14頭引きに乗る事が出来た。



これはかなり興奮した。自分の前に長い犬の列ができ、その犬達が一心に走っている。そして犬の躍動感がドンドン伝わって来る。しかもそれは、皆トップクラスの犬達なのだ。

僕はこの事を一生忘れないだろう。

仔犬

僕が忘れられない事はもうひとつある。前にもちょっと書いたが、その日は産まれて一年ぐらいの子犬たちのトレーニングに行った日の事だった。

初めてソリを引く子犬たちを連れて行く時は8頭引きでトレーニングする、まずリーダー犬を二匹、次に体の大きい犬をおく、これは走りたがらない子犬がいても、前でむりやりひっぱるためだ。そして次に子犬を二匹おいた。子犬はソリを引くことになれていないので、すぐにひもにからまってしまうのでフランクのサポートとして僕がついて行くことになった。

僕がソリの前に乗りフランクはソリを操縦してトレーニングに出発した。思った通り子犬達は、ひもに絡みまくった、そのたびにソリを止め僕が絡まったひもを直した。ひもに絡まった子犬をその度に怒らなくてはいけないのだが、僕はうまく怒ることができず、もたもたしていると、フランクもソリを降りてきて「ちょっと見てろ」といって子犬が絡まったのを直し始めた時、事故はおこった。



フランクが絡まった子犬を直そうとした時、その子犬の首輪がすっぽぬけ、他の七頭とソリがだれも乗せず走って行ってしまったのだ。しかもソリは僕の横を通り過ぎて行ったのに、それを止めることができなかったのだ。しかも、そこは家から2、3 km離れた位置だった。

フランクは「ファック」「ファック」とつぶやきながらスノーモービルをとり家に走った。僕は犬達が途中で止まっているかもしれないのでソリを追いかけることになった。だが僕はそのことをぜんぜん重大なことだとは思っていなかった。しかも走れど走れど犬の姿を捕らえることができなかった。だけど、とりあえず走っていた。そうするとそこへ、フランクがスノーモービルでやってきて僕を乗せ、またソリを追って走り出した。

そして、やっとポータージュ（森の道）で犬が止まっていて、捕まえることができた。フランクはすぐにスノーモービルを降り、犬にかけよった。僕も後をおった、そうすると一匹の子犬が倒れていた、フランクはその子犬を抱き上げ「ジーザス」と言った。そう、その子犬は死んでい

たのだ。

まだ力の無い子犬は一回倒れてしまうと、立ち上がることができないのである、しかも、他の犬はそんなことは関係なしに走りつづけるので、息が続かずに死んでしまうのだ。僕はその状況でどうしていいかわからず、たたずんでいた。

フランクは「家へ帰れない」とつぶやいた。なぜならば、その子犬はビビアンがとても可愛がっていた子犬だったのだ。

そして、僕らはその子犬をソリに乗せ、家は向かった。フランクは犬が絡まってもないのに何回もソリを止め考え事をしていた。僕はその背中を見ながら、ソリをつかむことができたかもしれない自分をうらんだ。

僕はその日、夕食を食べることができなかった。



犬小屋の空き

そして、ここで生活をして「死」を感じたことがもう一つある。

ある朝、いつものように外に出ると見たことのない犬がいたのだ。その犬はフランクが他の人から買った犬で、その日の朝に空港に取りにいったそうだ。

だが、もう犬小屋の空きは一個もないはずだった。フランクに新しい犬がいる小屋にいた犬はどこに行ったかたずねると、近くの違う小屋に行ったといった。

だが、その犬が移った小屋にいた犬はどこへ行ったのだろうか。それを尋ねると、フランクは苦笑しながら

「いってしまった」と答えた。

僕は始め意味がわからず、何回か聞いていると、前の晩に薬をうって、殺したということだった。

年齢をとった犬で、ペットとしても、もらい手のない犬は最終的には薬殺されるのだ。その犬は白く大きなオスのとても人なつこく、前の晩まで僕がえさをやっていた。

「走れなく、もらい手のない犬は殺す」
とんでもない哲学だ。

だが、ここは勝負の世界、そんな犬を飼い続けていたら犬は増え続けてしまうだろう。

不慮の事故で死んだ子犬と、人間によって殺された年老いた犬。この二つの「死」を僕は同じ死としか考えることができない。多くの点から、僕はこの職業をやっていけないだろう。





第3章 ハンティング編

ハンティング

今日は待ちに待ったハンティングだ！！

フランクの友人で、犬ゾリをしているフレッドという名のインディアンが、ハンティングに行くと言うので、連れて行ってもらう事にした。

ハンティングは、冬になるとオープンするアイスロードを通り、約200km北上した湖の上で行われる。ここで言うアイスロードというのは、冬になると湖が凍り、その湖の上に積もった雪をどけて造られた人工の道のことである。フレッドが言うには、雪の降りたては、一番危険で車が滑りやすいとのことだった。だが、氷の上の方がよっぽど滑りやすく危険に感じる。しかもタイヤは、オールシーズンタイヤのままだ。

出発は朝6時で、この時間はまだ真っ暗だ。この冬の日の出は、朝10時。日の入りは夕方3時だ。この時間帯に合わせ、ハンティングは行われる。

予定では湖に着き、昼食を食べてからスノーモービルに乗り換え、カリブ（トナカイ）もしくは狼をハンティングするはずだったが、何と目的の湖に着く前にカリブの大群に遭遇した。フレッドはすかさず車を降り、狙いを澄ましたかと思うと、4発弾を撃ち2頭のカリブを仕留めてしまった。



「何とあっけないのだろう」と、僕は思った。僕は湖の上をスノーモービルで2、3時間探すものだと思い込んでいたので、上着を7・8枚着込んでいた。だが、予想外にハンティングは、あっという間に終わってしまったのだ。

それからまた車へ戻り、今しとめたばかりのカリブの近くまで移動した。フレッドはすぐにナ

イフを取り出し、カリブの首を搔き切るとどめを刺した。カリブは2頭ともオスであったが、角はなかった。カリブの角は9月から11月の間に自然に抜け落ちてしまうという。それらの角はリスや鼠の貴重なカルシウム源になるそうだ。

フレッドは先程のナイフ1本で、解体作業を始めた。みる者を圧倒させるほど見事で、無駄の無い動きのさばき方だった。まず腹を切り、ついで内臓を取り出し、皮をむきはじめた。そして足4本を切り離し、首を斧で切り落とした。そして口から舌を取り出して終了した。

その間何と15分、たったの15分でさっきまで生きていたカリブはバラバラになってしまった。そして、それをもう一頭繰り返し、全てが終了した。

あっという間だった。気持ち悪くなる暇もなく、それは生ある生き物から、只の肉塊へと変ってしまった。時にはマイナス40度の世界で、同様のことをしなければならないので、あれ程の早さなのだと、フレッドは教えてくれた。

その後、得た肉片をそこに置いたまま、目的の湖に向かった。だが雪の為、視界も悪くなり、これ以上猟をする必要性も無いので、結局スノーモービルに乗ってのハンティングはなかった。

こうして、どきどきする暇もなく、ハンティングは幕を閉じたのだった。この日の猟の成果は、足8本、タン2個、胸肉2枚で、僕の分け前は足1本とタン1本だった。



旅立ちの経緯

旅のはじまり

最後に、どこにでもいる若干22歳の僕が、極寒の北の大地、北緯62度のイエローナイフから手紙を出すことになった。その旅立ちの経緯を書いておこうと思う。

ペンを取りはじめる前は、経緯を書くならイエローナイフに行く事になった、その事だけにしようと思っていた。しかし話すことは兎も角、作文嫌いの僕が、ここまで書いたからには、頑張っ全部、何もかも説明するつもりで書こう。

僕がカナダに来たのは、大学3年を終えた年の4月後半だった。4年に進級するのを止め、1年間休学した。海外で、1年間過ごしてみたいという高校の時思い描いた夢の実現の為である。

別に英語圏でなくても構わなかったが、ワーキングホリデーという制度が気に入り、その制度を採用している国の中でも、アメリカに程近いカナダを選んだ。別に英語圏でなくて良かったわけは、英語もまったく分からないからであった。

どれくらいの英語力かと言うとまず、空港でるのに1時間ぐらいかかった。その後、どうしてよいか全く解らず、空港出口で呆然と困っていた。そして、やっと日本人を見つけ、ダウンタウン行きのバスに乗る為に助けを求めたぐらいだ。そして、この日本人にとりあえずバンクーバーの情報色々教えてもらい、ホテルへ行った。大抵の人は始めのホテルや学校、ホームステイ先を日本で決めてから来るものだ、と言うのもこの時初めて知った。

そして何とかホテルにたどり着いたのだった。ホテルは旅の情報誌から見つけたものだった。そこは、入り口が2つあったので、一つの方に入ってみた。すると何とそこは、ストリップ劇場ではないか。しかも、すでにストリッパーはすっぽんぽんである。そして、そんなストリッパーを見て楽しんでいる、刺青をした昼間から酒を飲んでいる人達。僕は、カナダに対しての印象を、(犯罪の多そうな)アメリカと同じと考えていたので、これはかなり恐かった。

そして、すぐさまそこを出てフロントを見つけ、[旅の英語集]の“ホテル・チェックイン編”を見せ、「This! This!」と言うとチェックインは何かスムーズにいった。飯はマクドナルドで済まし夜になった。

その夜は、時差の関係もあり、なかなか寝付けなかった。そして、やっとウトウトしかけた時、非常ベルが鳴り出した。僕の部屋の前で、何人かの人が多タバタしていたが、恐くてドアの外に出る事ができなかった。ただ、ドアの下の隙間から見える靴の影を、どうして良いか解らずに、見詰めるだけだった。次の瞬間、窓の側へ行き、煙を確認しようとしたが、煙は上がってなかった。それでも一応、すぐ外へ出られる格好になり、荷物は全てバックにしまった。そしてひたすら、次に何が起こってもよいように待機する事にした。しかし、1時間経っても、何も起こらなかった。それで、取りあえず寝る事にしたが、さすがに眠る事なんて出来なかった。

学校探し

さて、話は変って、次にこの地で、自分がしなければならなかったのが学校探しであった。学校といっても語学学校だが、これは結構あるらしく、バンクーバーの日本語新聞から、その情報を得る事が出来た。ただし、またここで問題だったのが、TELして、その場所を聞くことだった。僕が取った行動はどんなものかと言うと...

まず、TELをして「じゃぱにーず、すたっふ、ぶり〜ず。」と言うと、何やら英語で言われたので「サンキュウ」と言って切る。そんなことを3, 4回繰返すと、やっと「ハイなんでしょう。」と答えが返ってきた。僕はとりあえずその学校に行くことにしたが日本人スタッフのいるようなところは日本人生徒も多いので、ホームステイ先の人が紹介してくれた別の学校へ一週間で移った。

このホームステイ先というのも、学校の紹介だとお金がかかるので、新聞から見つけた。とても良い家族で、ラッキーだった。

こんな感じで、カナダでの暮らしが始まったのだった。



そしてバンクーバーで4ヶ月暮らした後、カナダ、アメリカ1周の旅が始まることになった。これは、中学の時に考えていた夢だが、まさかあの当時、本当に行く事になるとは思いもしてなかった。

きっかけは、滞在先のバンクーバーで出逢った、たけしとブルー（あだな）に「アメリカ一周行きたいなあ。」と言ったら、「いいね。」と言ったので何がなんでも行く事にした。ブルーは結局、都合上行けなくなり、二人になってしまったので、日本から僕の友人の鈴木を呼び、この3人で行く事にした。この旅は、鈴木が会社の内定式に出なければならなかったもので、何がなんでもバンクーバーに一ヶ月後には帰ってこなければならなかった。

僕が財布を道端に忘れ、200km近く戻ったり、

たけしが、よそ見運転をして、時速100kmで車が回転し、死にそうになったり、

鈴木のカメラにフィルムがうまく入ってなくて写真が取れてなかったり、
グランドキャニオンが美しかったり、きつかったり、
ラスベガスで負けたり、
ニューヨークで美味しいものを食べたり、ミュージカルを観たり、
カリフォルニアで泳いだり、
スーパーの駐車場に止めて車の中で寝たり、
そして、なにより、よく車を走らせた。

といった内容だったが、一ヶ月という短い期間を、この上なく堪能することができた。走行距離は約13000kmだった。

北に向かう

その後、行き先は決めていなかったが、日本人のなるべく住んでいない、田舎町に行きたいと思っていた。そんな僕のところに、北の方にオーロラの見える街があるという情報が入ったので。アメリカ一周で何かに憑かれたように冒険熱に浮かされていた僕は、約1週間後には一人で北に向かって旅立っていた。

アメリカの旅では、車の中で寝ていたので、今回も安く上げる為に、車の中で寝る事にした。が、とんでもなく寒く、たえきれずに次の日からモーテルに泊まった。これはかなり高く付いた。つい10日前はロサンゼルスで、夏をエンジョイしていたのに、すでにここは冬に突入していた。

イエローナイフまでは約3000kmなので、3、4日で到着する事が出来るはずである。北に行くに従って街の数も少なくなっていた。街にはビルも、銀行もなくなり、イエローナイフの町が、どれほどの大きさか段々不安になってきた。だが、自分で一応目的地を決めた以上は、そこまで行って見なければならぬ気がした。



途中で川にぶつかり、フェリーで対岸まで車を運んでもらったり、道にバッファローがいたり、アスファルトの道が土になったりした。自分の心の中で、不安が募ってゆくのを感じた。それでも車を走らせた。

そして、ようやくイエローナイフの町にたどり着いた。思っていたより街は大きく、銀行も、ビル（10階建て程）もあった。僕は胸をなで下ろし、安堵した。

街でモーテルを探したが、一番安いのが\$100!と、とんでもない値段だった。ここイエローナイフでは物資を全て空輸で賄っている為に、何もかもが高いのだ。

それでも仕方なく、1泊はそこで泊まる事にした。そして、オーロラを観たらすぐに南へ下り、

小さな町へ移動し、仕事を探そうと決めた。

だが、10月は曇の日が多く、オーロラを観る事は難しいというのだった。案の定、その晩はオーロラを観る事ができなかった。僕はここまで来た以上は、何としても観たくなっていた。それで、観れるまでこの地に居ようと思い、他の安い宿を捜すことにした。そうした所、“YWCA”を見つける事が出来た。通常、“YWCA”は、女性だけが宿泊できる施設だが、このシャールームは、男もOKとの事だった。一泊\$20で、小さな部屋に2段ベッドが4つ置いてあった。その部屋には、すでに先客が2人居た。



一人はエドモントンから来た、ジェリーと言う名のパイロットで、仕事を探しにイエローナイフに来たと言う35歳のカナダ人で、それからかなり仲良くなり、今でも時々飲みに行ったりしている。もう一人は、何と日本人で、もっと北のイヌビクと言う町から自転車で来たという、変わり者だ。すでに6月にスタートして、3,000kmを走り、マイナス20度近い場所を、テントを頼りにここまで来たのだと言う田中幹也という人物だ。

僕はそこに滞在しながら、仕事を探す事にした。もしオーロラが見えたら他の町へ行き、もしその前に仕事が見付かったらイエローナイフに住むという計画を立て、町をしばらくうろつくことにした。

魚を売るおばさん

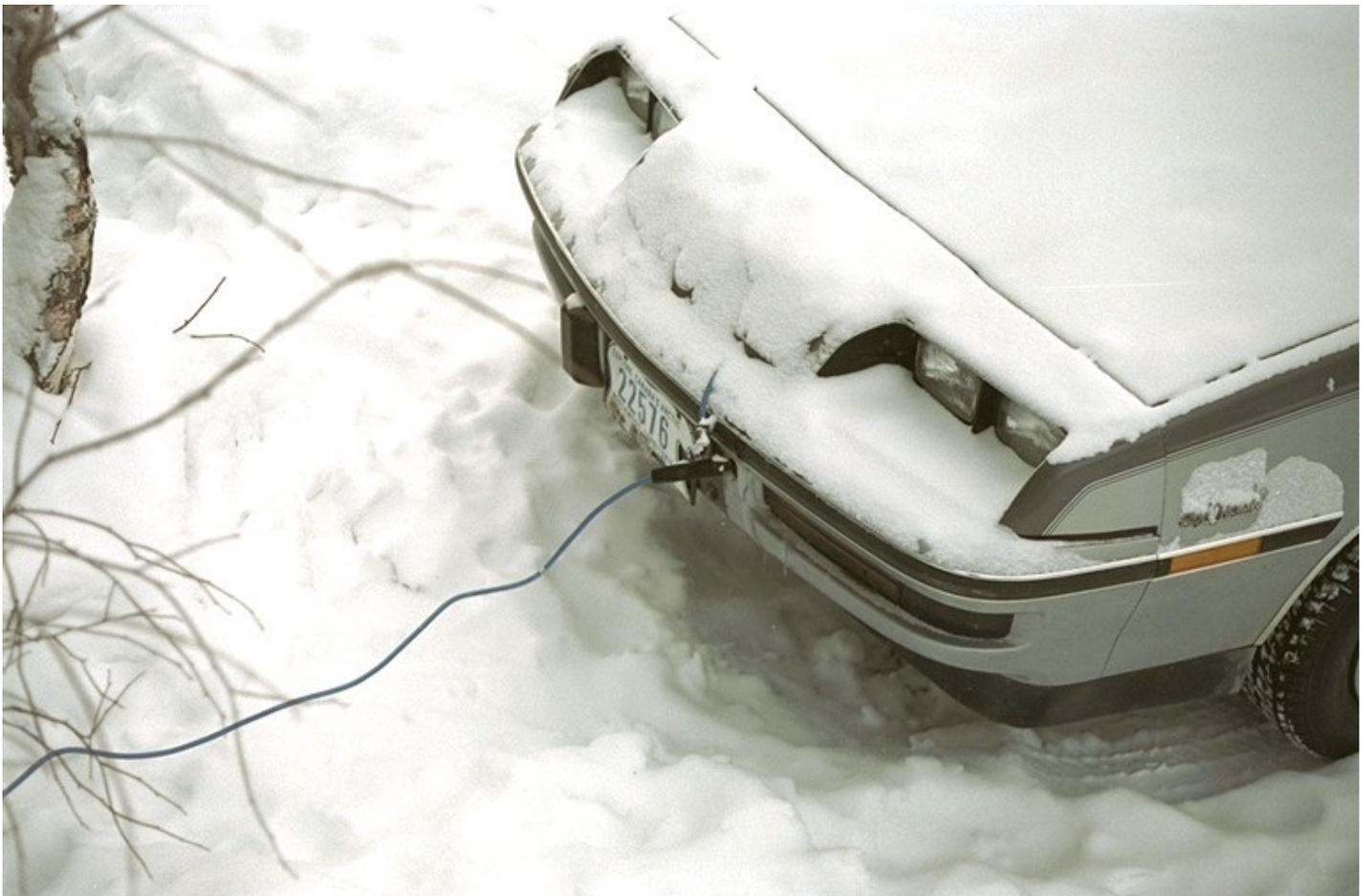
そんなおり、とある日僕は、一台の車で魚を売る一人のおばさんに出あった。ちょっと興味もあり、魚の名前など聞いてみたりしてるうちに話も弾みだした。それで、今仕事を探している旨を話すと、「漁師の仕事ならあるよ。」と、思いがけない返事が返ってきた。すかさず“これだ!”と直感し、その仕事がしたいと伝えた。

だが、おばさんは「この仕事はとても厳しい。並大抵じゃできない。ほとんどの人間がネイティブの人々だ。それに気温はマイナス40度、体感はマイナス60度～マイナス80度ぐらいまで下がる。といったが、ぼくはそれでも良いからと食い下がった。

で、おばさんは、「仕事が始まるのは湖の氷の約1ヶ月～2ヶ月後」だという。それでも僕はやるならこの仕事しかないと思い。すでにこの時、オーロラを観ていた僕は今聞いたばかりの仕事に就けるまでの、空白の1ヶ月間を別の事に充てる事にした。

まず、その1ヶ月の前半の2週間は、アラスカへの旅に、後半の2週間は日本への旅行へあてた。休学中とは言え大学生である僕は、どうしても都合（卒業研究室の決定、就職関連）で1度は日本に帰らなければならなかったのだ。

2週間後の日本行きのチケットを確保した僕は、早速アラスカへと旅立った。この旅は、ホテルやモーテルの宿泊をやめた。イエローナイフより北の極寒の地で、テントで旅をしている人間を知ってしまった以上は、そんな事はしたくなかった。“この寒い中をテントで旅をしている人もいるんだ。”と思いながら車の中で寝る事に決めた。準備として、まず車の窓には黒いビニールのゴミ袋をガムテープで貼り付けた。それからブランケットを2枚、スリーピングバックを用意し、そして3、4枚着込むことで寒さをしのぐ事にした。また、実際にどうにかそれだけの武装で、耐えながら旅行をしたのだった。



アラスカ

そして、アラスカのフェアバンクスに着いた僕は、さすがにシャワーを浴びたいと思い、安いモーターを捜したがみつからなかったので、セブンイレブンに行き聞くことにした。

セブンイレブンで店員のおばさんに、「モーターを捜している」というと

「いくらで泊まりたいんだい」

ときかれたので

「\$20ぐらい」と答えると

「私の家に泊めてあげる」と言い出した。

ちょっと恐かったが、やはり\$20は魅力的で泊めてもらうことにした。

部屋は引っ越したてで何も無く、僕はシャワーを浴びて、おばさんが帰ってくる前に寝てしまい、次の日も早く出てしまったので別に何と言う事はなかった。

とりあえず、北へ向かい北極圏まで行って帰ってくる計画をたてた。この道は今年の夏にオープンしたばかりで、やはりダートな道だった。ガードレールはないし、雪は積もっているし、その先は崖などという所はざらにあった。お金の無かった僕は朝飯も食わず走っていた。

昼食は次の町で食べようと思っていたが次の町などなく、時間は2時をまわっていて、北極圏もこえたあたりで、プス、プス、プスと車が止まってしまった。

エンジンをかけようとしても、かからず何か変な匂いがしていた、なんとそれはガソリンの匂いなのだ、僕はすぐに外へ出て車の周り確かめると、なんとガソリンが漏れているではないか。

これは危険と思い車からはなれ、状況を見守っていたが20~30分そうした後あまりの寒さに耐え切れず車の中に入った、もうだれかが通るのを待つしか道は無いのだ。なぜならばそこはフェアバンクスから320km次の町まで50kmの位置だからだ。

だが朝から6時間走り会った車はたったの2台という、その状況で腹もペコペコ、ここまできたら男も度胸と思ったが考えることは不吉なことばかり、ただただ時間がたつのを待つしかないのだ。



そして約2時間後はるか遠くからボッボッとトラックが来たのである。音だけはとらえることができ、どちら側から来るかわからなかったが、なんとそのトラックはフェアバンクスとは反対側から来たのである。

これでは意味が無い。

もし乗せてもらっても320km戻った後、また明日にでも帰ってこなくてはならない。だが、とりあえずトラックに止まってもらい話を聞くことにした。そうすると多分そのうち他の車も通るとのことだった。

お腹のすいていた僕は「何か食べ物はないかい」と尋ねると「僕のディナーはあるけど、グットラック」と言って行ってしまった。

そしてまたもや待つこと30分こんどはフェアバンクスのほうから車が来たのだ。この車はなんと車の修理屋で毎日ここを走り、故障の車をみつけては修理しているのだという。

その人は車の故障箇所をみて、とりあえず自分の車に僕を乗せ、次の町まで僕を連れていった。僕はやっとその日はじめてのご飯にありつくことができたのだ。

そして数十分後、その人が戻ってきて\$150だと言った。

これはあまりにも高いので、内訳を聞いてみると、1マイル=\$1で30マイル*2で\$60修理代\$90とのことだった。だが僕がそんなお金をもっているわけではなく、クレジットカードも期限が切れていた為、どうすることもできないが、とりあえず修理してもらうことにした。

そして2時間後、修理も終りこの町へ戻ってきた。さて、ここは先手必勝と「銀行はどこ」と聞いた。

しかし人口20人ぐらいの町に銀行などあるはずもなく、「そのものは無い」と言われたので

「じゃあ払えない」と言うと

「それは困った、う〜ん」と二人で考えた。

そして一つの打開策を見つけることができた、それはクレジットカードの期限は切れてしまっ

ているが、ナンバーは一緒ではないか。そして、それを機械に打ち込み電送した所、払う事ができたのだ。

そして、僕は無事、次の日フェアバンクスへ戻ることができた。

悪運続き

だが悪いことは続くもので、今度はフェアバンクスでエンジンの中からコトコトと音がしました。僕は心配になり修理屋を捜したところ、あいにく日曜日でどこも開いてなかった。が、偶然一つの修理屋の兄ちゃんが忘れ物をとりに来ている所にでくわした。

とりあえず車を見せようと、

「だめだこりゃ、また明日の朝来てくれ」と言われた。

フェアバンクスにもう一泊しなくてはいけなくなったので、前に泊めてもらったコンビニのおばちゃんの所に行き、もう一泊させてもらうことにした。だが僕は\$17しかもっていなかったのも、もし\$20必要なら銀行に行くと言うと、おばちゃんはやほど僕がお金に困っていると思っただらしく、お金は要らないと言ってくれた上に朝食までだしてくれた。

朝食はトーストと目玉焼きだったがバターも塩もこしょうも無く、あげくのはてにフォークも無かったが、とても心温まる朝食だった。

そして車を修理しバンクーバーに向けて旅立った。既に予定日を二日もオーバーしていたので、地図上の一番近い道を通ることにした。

近い道と言ってもその州のでかい道は2つしかないのだ、だがこの道はハズレだった。ダートもダート直径30cmぐらいの穴がボコボコしていて、とても走ることができないのだ。これは泥の道を雨の日にトラックが走りボコボコにしたまま乾いてしまっているのだ。その上、その日は雨でその穴に水がたまり視界も悪く、その先道がどれくらい続いているのかわからない状況であった。

イライラしてきた僕はそこを60~80kmで走っていた。そうすると時速50kmぐらいでアスファルトの道に変わった。やっと安心して走れると思い速度を時速100kmに上げた。そうすると車がぶれ始めたのだ。

そう、さっきの泥の道でどこかおかしくしてしまったのだ。とりあえずタイヤバランスはみてもらったが、結局もとにもどらず、よけいイライラしながらバンクーバーへ向かった。「急がば回れだ」と何回もつぶやきながら。

そんな、やっとの思いで旅の起点であるバンクーバーに着いた。

車は売ることに決め、僕は日本に一時帰国をした。

再びバンクーバー

そして2週間後、再び日本からバンクーバーに戻ってきた。

僕が日本に帰っている間に、バンクーバーに住む友達の、僕と同じ名のYUKOという女の子に車を預け新聞などに広告を出してもらっていた。バンクーバーに帰ってきた2週間後には、ちゃんと車を買いたいという人も見つかっていて、走行距離約13万kmで買い約16万kmになっている車を買値より高く売ることができた、そしてバンクーバーに1週間滞在後、イエローナイフに向けてバスの旅が始った。

バス代はバンクーバー～イエローナイフ間のキップを買うよりも7日間のフリーパスのほうが安いのでそれを買った。早くイエローナイフに着きたかった僕はバスを乗り継ぎ4日後にはイエローナイフから500kmぐらいの位置にあるヘイリバーに着いた。だが、結局そこからは、バスはあるもののバス会社が違い、そのチケットでは乗ることができず、\$50よけいに払わなくてはいけなくなった。

止むを得ず、僕はヒッチハイクでイエローナイフに行くことにした。

この選択は、この1年間の海外生活で最悪の選択だったかもしれない。その日はなんと-37度だったのだ。しかも1ヶ月前は車は沢山通っていたのに、この時はまったく車が通らないのだ。

しかも靴は普通の靴、手袋はのび～る手袋という、あまりにも軽率な装備だった。時々、車はつかまるものの、みんなイエローナイフまで行かず、10kmぐらいずつ3、4台の車を乗り継いでいった。

そして、途中で降ろされ、ひたすら待つこと30分。

この時間はかなり辛かった。靴はすでに凍りつき、ひたすら動いてなくては死んでしまいそうな状況だ。しかも、もうヘイリバーの町から遠くはなれ、森の中に一人で立ち、ひたすら車が来るのを待つしかない。前に北極圏で車が故障した時に、"これほどの寒さはない"などと思っていたが、それがかわいく思えるほどだ。

そして、この時一台の車が反対の方向からやってきた。反対だったので気にしてなかったが、なんとその車が引き返してきたのだ。車に乗っていたのはインディアンだった。このインディアンのいうことによ

「おまえの靴は寒すぎる。オレのをやる」と言い出したのだ。

僕はとりあえず車に乗ることにし、彼の家に行った。家は町から遠く離れた森の中にあった。そして彼は家族の写真を僕に見せ、バイオリンをひき始めた。3、4分ひいた後、バイオリンをやめ家の中を説明しはじめた。僕はあっけにとられ、ただただついてまわった。そして台所についた時、僕の視界になにかがとびこんできた。

それは彼が二日前にハンティングに行きしとめた、カリブ（トナカイ）の肉だった。

彼が「食べたいか？」と聞くので、「食べたい」と言った。

彼がそこで料理して食べさせてくれるのかと思っていたら、なんと彼はその足から肉を削ぎとりビニールに入れ、差し出したのだ。僕はもう断ることができず、バックにその肉を入れた。そして、それから彼は色々な物をくれた。

りんご、オレンジ、キャンディー、そして自分のはいていた靴までくれたのだ。これはムース（アメリカントナカイ）の皮でできたものだった。後でわかったのだが、これはとても高価な

もので、イエローナイフでも\$100~200するものだ。そして彼はウールの厚手の靴下もくれた。そして何を思ったか、彼はマッチをさしだしてきたのだ。

さすがに「それは、いらない」と言うと、

「おまえは今夜、火をたくことになったらマッチは必要だ」といい、無理矢理ポケットに押し込んだ。

彼は僕のことをとても貧乏人だと思ったのだ。さすがにこの寒さの中、野宿をしようとは思わない。



そして彼は僕をもとの道までもどして、最後になんと彼の手袋をくれた。これもムースの皮でできたもので、靴よりもっと高価なものだ。そして彼は最後に僕と一緒に写真を取り、去って行った。

そして僕はまた車を待った。だがやはりイエローナイフまで行く車はなく、少しづつ進んで行った。そして最高、二時間待った後、やっと一台のイエローナイフまで行くトラックをつかまえることが出来た。

朝の八時にヘイリバーを出て、夜の十時にイエローナイフに着くことが出来た。

イエローナイフ

そして冬の間はY M C Aがやっていなく、安く泊まれる所が無かったので、ジェリーの家に行くことにした。そして漁師のオバチャンにTELしたら、まだ漁は始っていなかったの、始るまで待つことにした。

だが、待てども、待てどもTELはなかった。

ジェリーは一人暮らしではなく、一軒家を三人で借りて住んでいるのだ、そして一週間が過ぎたあたりから、ジェリーのルームメイトから文句がではじめ、そこにいづらくなった。

そして町をうろうろしていると、そこに一台の自転車があり見たことのある男の人がハンバーガーを食べていた。なんと田中幹也さんだった。

彼は一回ヘイリバーまで行ったのだが、それ以上南に行っても暖くなるだけでつまらないので、戻ってきたのだという。なんと彼は約マイナス37°の中、テントを張り自転車で戻ってきたのだ。

だがその代償は少ないものではなかった。指と鼻が凍傷になってしまったのだ。そして幹也さんに今の状況を説明したところ、イエローナイフでヘリコプターのパイロットをしている日本人がいるというので紹介してもらった。

その人は、鈴木さんといって夏はパイロット、冬はオーロラのツワコンをしている方だった。さらに、ベット&ブレックファースト（民宿）も経営していて、ちょうど人手が必要だった。ということで、手伝うことを条件に、泊めてもらうことにした。

それから一週間ぐらい過ぎた。

だが、一週間ぐらいたっても漁師のほうからの連絡はなかった。

鈴木さんが、犬ゾリをしてる人を知っているというので紹介してもらうことができた。最初はとりあえず鈴木さんの家から手伝いに行っていたが、そのうち泊めてもらうようになり、住み込みで働くことになった。

そして、住み込みを始めて二日後に漁師から連絡があったのだが、すでにここで仕事を始めていたので、しかたなく断った。

まあ、ここまでが「旅立ちの経緯」となる。正直、ここまで長い文章になるとは思わなかった。

手紙のおわり

この手紙は、せっかくカナダで生活をしているのだから、ちょっとまとめてみようと思い書き始めた。最初は4、5枚で終わる筈だったが、結局こんな枚数になってしまった。自分でも驚いている。ここに書けなかった事も、沢山、いろいろな体験をする事が出来た。

例えば、バンジージャンプ、スカイダイビング、スキューバーダイビング、モーターボート、乗馬、ニューヨークで食ったロブスター、ペンティクトンに旅した時、車のライトが見えなくなるぐらい張り付いた蚊、その時、ブルーとたけしとで飲んだトロピカルジュース、バンクーバーの街中にスカンクやアライグマが住んでいる事、一人暮らしをしている時ホモにパンツを盗まれた事……………などである。

だが、もうカナダの生活も終わりを告げようとしている。「どうにかなる」と思いカナダに来て、どうにかなってしまった。このチャレンジ精神を忘れることなく、強く生きていきたい。この後、ヨーロッパに向け新しい旅が始まるが、もっといろいろな体験をしていきたい。

1996年1月16日

オーロラの見える北緯62°の町イエローナイフにて



本作品は、私が作者である彼から1996年当時に受け取った手紙である。当時、内容が面白かったので、どちらが言い出したか忘れたが、手書きの文章を、パソコンで打ち直し、且つホームページ化して公開している。

当時Windows95が出た翌年といえ、まだインターネットもMSNのアイコンからダイアルアップ接続する人も多く、個人のホームページも数少なかった様に思う。

その当時の手紙を何故今更、電子書籍化し、再度世に出そうと思ったのかを書くことで後書きとしたい。

発端は、私が購入したてのiPad片手に、出張先の仙台で、彼と数年ぶりに再会したことにある。居酒屋で、昔の旅行話をしているうちに、昨年、創刊30周年で出版された『「地球の歩き方」の歩き方』という書籍の面白さと、最近はバックパッカーやワーキングホリデーに参加する日本人が激減しているということを私に教えてくれた。

もしかするとGoogleのStreetViewに代表される様に、IT技術の発展によって行った気になる人。行かなくても情報が手に入る時代がそうさせているのかも知れない。そうだとすれば、とても残念だ。自分の躰でぶつかって、失敗しながらも手に入れた経験値は、決してIT技術では手に入らないのではないだろうか。

この本は、個人的な旅行記だ。それでも誰かには、その楽しさが伝わるだろう。

彼の様な旅をした人は、70年代から考えれば、もっと沢山いると思うし、実際「地球の歩き方」はそんな個人の手記から始まっている。でも多くのそれは、個人の日記やアルバムに埋もれてしまっている。

考えれば旅行記は個人出版に向いていると思う。荒削りで、多少読みづらくても、その人しか経験し得ない、そのときの感情の高ぶりや思いが伝わり、読み手に伝わる。

実際、彼の手紙の「てにをは」私が直している。それでも、かなり拙い手紙で、読者にはかなり申し訳ないのだが、そのまま書籍化している。文章の巧みさ以上に伝わる部分があると思ったからだ。

今より以前では商業的には乗らないものは本にはならなかった。でも友人や知り合いが旅行したとき、人はその人から旅先の話を知りたいものだ。

だから今、電子書籍と個人旅行はベストな組み合わせであり、もっと多くの人が作品を出して、このジャンルの本が増えてくれたら良いと思っている。そして、それに刺激された人がまたバックパッカーの旅やワーキングホリデーに参加してくれたら、さらに素敵なことだし、とても嬉しく思う。